恋日和

子猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋日和

【Ｎコード】
Ｎ１１５１Ｆ

【作者名】
子猫

【あらすじ】
高校三年生になった僕。もうすぐ卒業だ。たいした思いでもなく、今僕はいつもの屋上にいる。誰も訪れたことのない屋上に誰かがやってきた・・・・・

僕が今いるのは学校の屋上。ここは僕だけの空間だ。
だけどある日から、ここは僕とキミとの空間になった。

昼休みになると僕は屋上に走った。いつも一人でここで弁当を食べている。友達がいないわけじゃない。中学からの付き合いの友達が何人かいるし、高校に入ってからも何人か友達はできた。でも、この僕だけの屋上には誰も呼んだりしない。

この屋上の使い道は考え事をするときとかだ。晴れている青い空を見つめていると、なんでも解決できる気がする。もうここに来てから三年が経つ。そう、あと二ヶ月も経たないうちに僕たちは卒業してしまう。僕は高校に入ってからこれといった思い出がない。秋に行った修学旅行でもたいした思い出を作ることができなかった。青春時代、もう何もないまま過ぎちゃうのかな・・・・・。

そんなことを思っていると屋上の扉が開いた。昼休みに人が来るのは初めてだったので、最初は先生がきたのかと思った。でもそこにいたのは顔に見覚えのない女の子だった。この学校の生徒であることは間違いないけど、一体誰なんだろう。その子は小柄で、髪は長く縛らないでいて、赤いフチのメガネをかけていた。まだ昼休みは始まったばかりで普通の子なら教室で友達同士でたわいのない会話をしているはずだ。

彼女からはなんとなく自分と似たものを感じていたんだ。

しばらくの沈黙。僕が黙ってぼんやりと彼女を見ていたら、突然口を開いた。

「・・・隣、いいですか？」

彼女の口にした言葉を聞いた瞬間、ドキッとした。
「別にいいですけど・・・」
初めて会う子だな。でも、なんで僕なんかと・・・。すごくおとなしそうな子だ。でもきりっとした目は輝きや希望があふれている。若いなぁ・・・と思っていた。僕たちはまたしばらく黙ったままだった。空を見上げて風を感じていた。

「私、二年の河合麻衣って言います。いいところですね、ここは。いつもここにいるんですか？」
「うん、そうですよ。ここに来ると落ち着くんです。いろいろと考えられるし。入学したときからのお気に入りの場所です。」
僕は何でこんなことをこの子に話すんだろう。この屋上のことは友達にも話したことはない。ここに来ていることだって知っている人は少ないだろうし・・・。
「えっと、君はどうしてここに？」
僕はさっきから気になっていたことを思い切って聞いてみた。
「あ、すみません・・・迷惑でしたか？実は私もここが好きなんです。昼休みじゃないけど、放課後とかに一人でたまに来たりしていました。」
「ああ、そうなんだ。・・・じゃあ、これからは二人ですね。」
と、つい僕はおかしなことを言ってしまった。彼女は顔を赤くしてた。僕も赤くなる顔を見せないように空を見て顔をそらせた。

何言ってるんだろう僕・・・

しばらく気まずい雰囲気が流れた後、河合さんが沈黙を破った。
「わっ・・・私！そろそろ教室に戻りますね！それじゃ、また明日！」
慌てたようにして急ぎ足で彼女は屋上から出て行った。そのときに見た後ろ姿はなんだかとても切なくて、どんどん遠ざかっていった。

でも、また会えるような気がした。また明日、か。あの子は一体なんだったんだろう。そういえば僕は名前を言わなかったな。でも彼女は僕のことを知っているような口ぶりだったような・・・。

昔、歩道橋で買い物袋を持っているおばあちゃんがいた。あの日、僕は重そうな荷物を持っていたおばあちゃんを助けてあげたんだ。たしか中二の頃だったと思う。

あのとき女の子が僕の事を見ていたなんてそのときは気づかなかった・・・・・

次の日の朝は雨だった。バスで通学をしている僕にとってはたいした支障じゃない。僕は通学のときは一人。学校の手前でバスを降りると雨の中を自転車で走っている子がいた。昨日、屋上であった女の子だ。自転車置き場に着くと彼女は急いで行こうとした。

「待って！河合さん！」

「あ・・・先輩。おはようございます。」

「傘、忘れたんでしょ。入りなよ。」

彼女はちょっと恥ずかしそうにしながらもコクン、と首を振って僕の傘に入った。これってアイアイガサとかいうやつなのかな。髪をぬらした彼女は白い息を手に吹き掛けて顔を赤らめていた。少し手が触れた。すごく冷たい。もう一月の終わりだから寒いのかな。僕は自然に彼女の手を握っていた。すると彼女がさらに顔を赤らめたのに気づいた。

「あ、ごめん・・・」

「いえ、いいんです・・・先輩の手、あったかいですね。」

そういわれてからまた黙ってしまった。彼女の手に触れた瞬間、すごく守ってあげたいような気持ちになった。昨日知り合ったばかりなのに、ずっと昔から見てきたようなそんな不思議な気持ちにもな

った。

雨は止んで、昼休みには今朝の雨がうそのように晴れていた。午前中の授業はほとんど頭に入っていない。ただ早く昼休みになってほしい、一秒でも早く彼女のところに行きたかった。

昼休みに入ってすぐ、僕は急いで屋上に行こうとした。屋上への階段を登ろうというところに彼女はいた。鞄を抱えて。

「河合さん！こんにちは」

「へ！？先輩！！？？」

後ろから呼びかけると彼女は驚いてバランスを崩して、階段から落ちそうになった。僕は危ない！と言って、走り寄った。ぎりぎりのところで彼女を支えることができた。

「あっ！・・・ふぅ、ありがとうございます。」

「いや、俺のほうこそいきなり話しかけちゃってごめん！」

僕は彼女の小さい体を抱きかかえるように支えていた。

なんて小さい体なんだろう・・・本当に、触れたら壊れてしまいそうなほどだった。見た目はあんなにしっかりしていて強い目をしているのに、こんなにも弱いものなのだろうか。

気持ちが落ち着いてきたとき、僕は彼女をまだ抱えていることに気がついた。

「えっと・・・鞄、持ってあげるね・・・？」

赤くなる顔を悟られないように背けながら言った。

「え？ああ、ありがとうございます・・・。」

彼女の顔もまた、赤くなっていることに気がついた。

屋上に着いた僕たちは、また青空を眺めた。思い悩んでいるとき、屋上に上って空を見ては空ってこんなに綺麗なんだ、と思っていたが今日の空はまた格別だった。隣を見ると彼女の横顔、そしてあの強い眼差し。そんな事を思っていたら彼女は僕の視線に気がついた。

「先輩はあのときと同じですね。」
「・・・あのとき？」
と、何のことだかわからなかった僕は彼女に訊ねた。
すると彼女は信じられない、とでもいうような顔をして
「中学生の頃ですよ！あのときも先輩は歩道橋で荷物を抱えたおばあちゃんを助けていました。そして今度は私のことも・・・。本当はあのときから・・・」
言葉の途中で彼女は話すのをやめてしまった。そして下を向いてしまった。何かを隠すように。
「え？」
僕は聞き返した。すると彼女は突然、顔をあげて笑顔になった。
その笑顔は今までに見てきたどんなに綺麗な青空よりも眩しくて、
僕は見とれてしまった。
「お弁当、食べましょう。今日は天気も良くなりましたね。」
太陽が顔を覗かせた今日は恋日和。
卒業の一歩手前で僕の屋上は僕とキミの屋上になった。

（後書き）

短編恋愛小説に挑戦。お楽しみいただけましたか。感想をぜひお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1151f/

恋日和

2010年12月26日14時27分発行